

「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援 第4回同志社大学・早稲田大学共同SDワークショップ」を開催

大学国際連携推進機構

2016年9月22日、寒梅館ホールにおいてSDワークショップを開催した。本ワークショップは文部科学省補助事業「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援（GlobalJapan）」（以下、GGJ）の一環として、本学と早稲田大学の共催で毎年開催しており、今回で4回目となる。GGJ最終年度であり締めくくりとなる今年は、「グローバル社会における大学の役割～大学職員の立場からのアプローチ～」と題して実施した。

当日は、北川雅章副学長・国際連携推進機構長の開会の挨拶に始まり、第1部の講演会では、文部科学省高等教育局高等教育企画課国際企画室長の岩淵秀樹氏より「大学の国際化とグローバル人材育成（SDの観点から）」をテーマにご講演いただいた。続く、第2部では事例報告として、早稲田大学人事部長の木村和夫氏、西岡徹本学総務部長、関西学院大学東

京丸の内キャンパス課長の坂田穂氏より、GGJ採択後を中心とした各大学での取り組みや変化等の事例をご紹介いただいた。第3部では京都大学企画・情報部企画課長兼総長特命補佐（国際戦略）の佐藤邦明氏をコーディネーターに迎え、第1部・第2部の登壇者をパネリストとして、「GGJの理想と現実のギャップ」「国際化にかかるコスト」「今後の展開」等についてパネルディスカッションが行われた。最後に早稲田大学理事の森田典正氏による閉会の挨拶で閉じられた。大学や関係機関から約120人の参加があり、参加者からも積極的に質問等が出されるなど、盛況のうちに終了した。

これまでの大学にお



フィリップス・アカデミーとの協定締結

法人事務室



この度、学校法人同志社とフィリップス・アカデミーは、学術的・文化的交流を深める協定を締結した。

同志社の創立者である新島襄は、幕末の1864（元治元）年、激動する日本の将来を憂い、国禁を犯して脱国し、約10年間にわたってアメリカのフィリップス・アカデミーやアーモスト大学等で学び、キリスト教の洗礼を受けて帰国し、国内外の多くの人々の協力を得て、また、見えざる神の手に導かれて、1875（明治8）年11月29日、京都の地に同志社英学校を設立した。

2015年は、新島襄がフィリップス・アカデミーに入学して150

周年、同志社創立140周年の記念の年であり、これを記念して、学校法人同志社はフィリップス・アカデミーと協定を締結する方向で調整を進め、この度の締結となった。

フィリップス・アカデミーは、アメリカ合衆国マサチューセッツ州アンドーヴァーに所在し、テンスクールと呼ばれるアメリカ合衆国内において歴史的起源が古く権威のある名門ボーディングスクール10校の中の1校である。

現在、フィリップス・アカデミーとは、同志社香里中学校・高等学校と同志社国際中学校・高等学校がサマーセッションへの参加や訪問を行うなど個々の学校レベルでの交流は行われているが、今回法人レベルでの協定を締結することで、組織的な対応が可能となり、新たな連携につながることが期待される。

同志社女子大学の集い2016
安中ツアー

女子大学広報部広報室広報課



新島学園礼拝堂で講演する加賀学長

2016年9月19日（月・祝）、「同志社女子大学の集い2016安中ツアー」を群馬県安中市で開催しました。これは女子大学創立140周年を記念し、新島襄ゆかりの地を巡るツアーとして企画したもので、東京駅集合、高崎駅集合併せて150人を超える卒業生と在学生保護者が参加しました。

高崎駅から4台のバスに分乗し、新島襄旧宅、安中教会を安中市観光協会ボランティアガイドの方の案内で巡りました。新島襄旧宅は1874年にアメリカから帰国した新島襄が滞在した家で、ツアー参加者はガイドの方の説明を聞きながら邸宅や展示室を見学しました。安中教会は、新島襄から洗礼を受けた地元の求道者30人によって創立された群馬県最初のキリスト教教会です。教会では、ガイドの方の建物説明のほか、江守秀夫牧師から新島襄とキリスト教の関わりなどについてお話を聞きました。あいにくの天気にも関わらず、各所で記念写真を撮る姿が見られました。昼食は、並木苑を訪れ、地産地食の特別折弁当をいただき



お話をされる江守秀夫安中教会牧師



新島襄旧宅で記念写真を撮る参加者

また、その後、新島学園にて加賀裕郎女子大学学長が「女性・日本社会・同志社―2030年を展望する」と題し、女子大学創立の起源や沿革、現在の学びと女性を取りまく環境の変化を踏まえて今後女性がどう生きるべきかなどについて講演しました。

参加者からは、新島襄ゆかりの地を巡る同志社のルーツに触れる機会を喜ぶ声が多数聞かれました。

「世界に誇る地域発研究開発・実証拠点(リサーチコンプレックス)推進プログラム」に
本学が共同提案機関として採択されました
大学研究開発推進機構

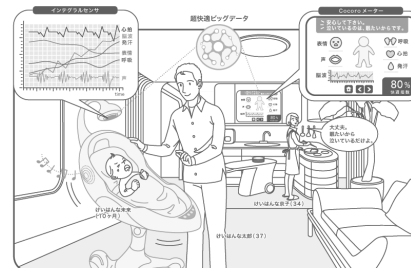
2016年9月に、国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)が実施する「世界に誇る地域発研究開発・実証拠点(リサーチコンプレックス)推進プログラム」に(公財)関西文化学術研究都市推進機構を中核機関とし、京都府、国立研究開発法人情報通信研究機構(NICT)、奈良先端科学技術大学院大学、同志社大学、奈良県立医科大学、オムロン(株)、サントリーホールディングス(株)、(株)島津製作所が共同提案し、これらを含む32機関が参画する「iBrain×ICT「超快適」スマート社会の創出グローバルリサーチコンプレックス」が採択されました。リサーチコンプレックスとは、地域において集積している研究機関、企業、大学などがその事業化、人材育成を一体的・統合的に展開するための複合型イノベーション推進基盤です(科学技術振興機構HPより)。

現在の日本社会ではストレス、人口減少、地域社会の衰退などの諸課題を抱え、これらに起因した社会全体の閉塞感・経済活動の停滞が問題となっています。これらの背景のもと、人々は「モノの豊かさ」より「ココロの豊かさ」を強く求めるようになりました。以上の認識に基づいて、拠点では、けいはんな地域の強みとなる「iBrain(脳・人間科学技術)」と「ICT」の融合を核に、「ココロの豊かさ」を創出する技術開発推進を通じた「超快適」スマート社会の創出を目指します。これを通じ、社会課題の解決と、新たな事業創出による経済活動の活性化につなげます。

本学は、人材育成活動を通じ、地域の企業群等と連携を深め、拠点のエンジン機能を担います。具体的には、本学の有するMRI(Magnetic Resonance Imaging:核磁気共鳴イメージング)装置等を用いた体験実習、脳科学・赤ちゃん学などに関する専門知識やオープンイノベーションに関するセミナー、アイデア創発ワークショップなどを企画・運営し、プロデュースマインドを持った人材育成の場の構築に向けて中心的な役割を担います。

また、本学の研究者が、(1)従来のオフィスなどを革新する知的環境デザイン、(2)赤ちゃんから高齢者までの衣食住イノベーションをテーマとする研究開発に参加し、事業化に向けて取り組みます。さらに、けいはんな地域にあるKICK(けいはんなオープンイノベーションセンター)における「超快適」空間に関する研究開発および実証研究においても中心的な役割を担います。

これらを通じ、拠点での産学・官・地域住民によるイノベーション・エコシステム(生態系)の共創に貢献いたします。



赤ちゃんの快適空間の未来イメージ

男子テニス部 インターハイ出場

国際中学校・高等学校教諭 古城正裕 こじょうまさひろ

【明るいチーム】

週4回、各日2時間の練習が基本。他の強豪校と比較して練習時間が少ない中、練習には工夫がある。練習メニューは監督から一方的に指示されない。どのような技術を得れば、どういうプレーができるかという「ゴール」が選手に感じられるように「助言」が出される。そのため、選手は練習にワクワク感が持てる。また、指示に従うというスタイルではないため、その自由度のある練習形態には同志社教育が垣間見られる。部員間に先輩、後輩の隔たりはなく、チームは「思いやり」「自由」「コミュニケーション」を大切にしている。

【団体】全国インターハイの団体でベスト16

過去、選抜（団体戦）での京都府の優勝は達成したが、インターハイ予選では優勝経験はなかった。創部以来37年間、京都府第3位は

11回、準優勝は8回。何度も挑戦を続け、ようやく悲願の優勝を果たした。

全国大会の前に行われる近畿選抜でも第3位を獲得。近畿選抜でも全国大会でも初出場を感じさせない堂々としたプレーで1回戦、青森県代表校を3-0で勝利。2回戦は岡山県代表校（今年、昨年ともにベスト4入賞）に善戦したが接戦の末1-2で敗退しベスト16に終わった。そのチーム力と積極的なプレーは雑誌で大々的に取り上げられた。

メンバー…藤井颯大（3年）岩田真優（1年）西村修平（3年）瀧井嶺治（2年）川田翼【キャプテン】（3年）

【個人】全国インターハイのシングルス・ベスト8

エース藤井はシングルスで全国優勝を狙っていたが、優勝者と準々決勝で対戦しベスト8。全日本ジュニア、国体もベスト8。ワ



【今後に向けて】

厳しさは選手自らの意志で自分に対して求めるもの。監督やコーチ、先輩などの周囲から強制されるものではない。自立の精神をもとに心の中を自由に生き生きと活動できる環境を推し進め、次のステップへと上っていききたい。

新しい校舎での文化祭

女子中学校・高等学校教諭 古谷直子・山田哲久 ふるたになおこ やまだ あきひさ

同志社女子中学校・高等学校では2016年度より新たに建設された新希望館を使用した文化祭を実施した。これまでの文化祭では旧校舎である黎明館・旧希望館に加えて、栄光館・静和館・新生館と全ての校舎を利用して文化祭を開催していた。新校舎建設にあたって課題となったのが、新校舎である希望館を文化祭でどのように使用するかという点であった。単純に旧校舎で行われていた行事をそのまま新希望館に移動させるのではなく、生徒達が作り上げる作品や催物になるべくたくさんの来場者に見てもらえるようにと、生徒を中心に計画を立てた。

大きな変更点としては、新希望館に新たに設けられた吹き抜けの空間であるアトリウムを文化祭で使用したことである。アトリウムにステージを設置し、これまで栄光館や新生館などで行われていたクラブや有志団体の催し物を行った。一例を挙げれば、これまで栄

光館がその発表の舞台だった体操クラブはアトリウムでの公演となったが、アトリウムは栄光館に比べて客席が近く、生徒たちの迫力ある演技が客席の感動を誘った。また、アトリウムは吹き抜けの空間であるため、軽音楽クラブの演奏は校舎中に響き渡り、一体感のある催物となった。

そのステージに華を添えたのが、生徒たちが作成した校舎を彩る様々なデコレーションである。ステージ後方に設置されたパネルや、吹き抜けの空間を利用した飾り付けなど、小さな空間にも心を配ったデコレーション

が文化祭をよりいっそう盛り上げた。

また、東日本大震災や熊本震災の復興支援活動としてカラーやグッズを販売した。これらの販売収益は、東日本大震災や熊



本震災の復興支援金として、東北や熊本へ送った。自分たちの活動が支援へとつながっていく過程を生徒たちは実感しているようだった。

新しい校舎を利用した文化祭は好評の内に幕を閉じたが、この成功には文化委員長をはじめとする文化祭企画委員の存在は欠かせない。文化祭に関わる全ての活動は彼女たちによって実現したと言っても過言ではないだろう。これからも彼女たちが創ってきた「文化」を支えていきたいと思う。

同志社小学校 10周年記念の集い

同志社
十ウ

小学校教諭 かわさき くみ こ 川崎公美子

同志社小学校は、「一国の良心」と言うべき人物を育てるという新島襄先生の志を受け継いで2006年に開校し、お陰様で今年10周年を迎えることができました。

創立当初より、同志社の理念に基づく良心教育と子どもたち一人ひとりの学びを大切にする道草教育に取り組み続け、これまでに卒業した子どもたちは570人になります。

この大きな節目を迎えるにあたり、2016年11月20日（日）、第一期生から第七期生までの卒業生たちと退職された先生方とともに「同志社小学校10周年記念の集い」を開催しました。

同志社小学校のアリーナに、大谷総長、水谷理事長や歴代の鈴木校長、森田校長、奥野校長を来賓としてお迎えした集いは、総勢300人余りの参加者による静粛な中にも和やかな雰囲気包まれた同志社小学校らしいものとなりました。

ました。

2時間という短い時間ではありましたが、記念礼拝や10周年記念誌（口絵参照）より絵本の朗読、また10年間をふりかえるDVDとインタビュールなど、バラエティーに富んだ内容で楽しいひとときを過ごし、お互いの絆を深めることができました。

また、当日は暖かい陽気に恵まれ、卒業生たちは、紅葉の美しい校庭を散策したり、点灯式用に裝飾されたクリスマスツリーを眺めたりしながら、いつまでも小学校時代の思い出を懐かしんでいました。

今回の集いは、次の10年にむけて新たなスタートを切る良い機会となりました。

